

2011 年(平成 23 年) 3 月 3 日

第 3 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

受賞者の決定および表彰式開催のお知らせ

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)では、「第 3 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」の選考を行ない、平成 22 年度の功労賞および奨励賞について下記のとおり決定しました。

同賞は、スポーツ振興において多大な実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献された人物を表彰する制度です。平成 20 年度に表彰制度を創設し、今回で 3 回目の実施となります。

なお、「第 3 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 表彰式」を、2011 年 3 月 14 日(月)にヤマハリゾートつま恋(静岡県掛川市)にて開催いたします。

報道関係の皆様におかれましては、ぜひご臨席賜りますようお願い申し上げます。

記

【受賞者について】

平成 22 年度 第 3 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 功労賞

- ◇受賞者 : 高田 静夫(財団法人日本サッカー協会 参与)
- ◇選考理由 : 日本人審判員の育成をめざした各種制度の確立と運用

平成 22 年度 第 3 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 奨励賞

- ◇受賞者 : 中村 宏之(北海道ハイテク AC 監督)
- ◇選考理由 : 雪国から世界をめざすトレーニングの独自開発と実践
- ◇受賞者 : 中北 浩仁(アイススレッジホッケー日本代表チーム 監督)
- ◇選考理由 : 強化システムの大改革で日本初のメダル獲得にチャレンジ

※選考方法

2010 年 10 月 1 日～11 月 15 日の期間、候補者推薦の公募を実施し、大学、競技団体、メディア、ジャーナリスト等の推薦による候補者の中から、選考事務局による候補者選考会、並びに選考委員会による候補者決定審査会で審査を実施。その後、当財団理事長の承認を経て決定。

【表彰式について】

平成 22 年度 ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 表彰式

- ◆日時 : 2011 年 3 月 14 日(月) 午後 3 時より(受付:午後 2 時 30 分より)
- ◆場所 : ヤマハリゾート つま恋(静岡県掛川市満水 2000)

■ この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください
公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)
担当・河邊 〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500 番地
Tel. 0538-32-9827 Fax. 0538-32-1112 <http://www.ymfs.jp>

■ ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞について

「ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」は、スポーツ界において多大な実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物を表彰するものです。スポーツ振興において「縁の下の力持ち」として活躍する(した)チャレンジスピリットあふれる受賞者の実像を通じ、挑戦することの尊さを広く社会に伝播することを主な目的としています。競技者をはじめ、指導者や研究者、また普及・支援に携わる人々やジャーナリストなど、さまざまな分野において成果を上げた人物を対象とし、合わせて目標に向かって自分自身を磨き上げるそのプロセスを重視して、その努力と成果に敬意を表して表彰を行います。

■ スポーツチャレンジ賞「功労賞」と「奨励賞」について

「ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」は、現在のスポーツ普及・振興の礎となった長年もしくは過去のチャレンジに対する「功労賞」と、表彰年度ごとに世界トップレベルの成果を生み、今後さらなる成長を期待される短・中期的なチャレンジに対する「奨励賞」の 2 部門があります。いずれの賞においても、これまで注目を浴びることが少なかったものの、本来は高く評価されるにふさわしいチャレンジを表彰します。

	功労賞	奨励賞
対象となる チャレンジ	長年にわたるスポーツ振興への貢献や過去の先駆 的な実績を誇るチャレンジ	今後のスポーツ振興に大きな影響力が期待される、そ の年、極めて高い成果を上げたチャレンジ
表彰対象者	すでに優れた成果を上げ、功を成した人物	その年、高い成果を上げ、今後さらなる成長が期待され る人物
評価のポイント	長年もしくは過去に行われ、年数を経てから高い成 果と認められた尊敬に値する礎的、先駆的なチャレ ンジであること。たとえば指導者、研究者、審判、ジ ャーナリストなどによる、その競技やスポーツ全体 の底上げに貢献、もしくは海外などで裾野拡大に尽 力したチャレンジなど。	短期的、もしくは中期的に行われ、その年に高い評価を 受けた賞賛に値するチャレンジであること。たとえば指 導者、研究者、トレーナー、サポートメンバー、審判、ジ ャーナリストなどによる世界レベルの成果を発揮するに あたり、重要な役割を果たしたチャレンジなど。
賞金／副賞	賞金 100 万円(チームの場合は 200 万円) 賞状・メダル	

ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 選考委員

選考委員長 浅見俊雄 東京大学名誉教授・日本体育大学名誉教授

選考委員

西田善夫 NHK 元解説委員・スポーツアナリスト
加賀谷淳子 日本女子体育大学名誉教授
福永哲夫 鹿屋体育大学学長・東京大学名誉教授
伊坂忠夫 立命館大学スポーツ健康科学部教授
景山一郎 日本大学生産工学部教授
草加浩平 東京大学大学院工学系研究科特任教授
篠原菊紀 諏訪東京理科大学共通教育センター教授
寒川恒夫 早稲田大学スポーツ科学学術院教授
吉田茂 筑波大学人間総合科学研究科教授
綿貫茂喜 九州大学大学院芸術工学研究院教授
衛藤隆 社会福祉法人恩賜財団母子愛育会日本子ども
家庭総合研究所副所長・東京大学名誉教授
遠藤保子 立命館大学産業社会学部教授
川上泰雄 早稲田大学スポーツ科学学術院教授

小西由里子 国際武道大学体育学部教授
定本朋子 日本女子体育大学大学院研究科長・基礎体力研
究所所長・教授
田原淳子 国士舘大学体育学部教授
山本裕二 名古屋大学総合保健体育科学センター教授
ヨーコゼッターランド 元バレーボール選手・スポーツキャスター
今給黎教子 海洋スポーツインストラクター・冒険家
村田亙 ラグビー7人制日本代表監督
大坪豊生 ヤマハ発動機株式会社取締役
鈴木正人 ヤマハ発動機株式会社取締役
岸川善次郎 ヤマハ発動機スポーツ振興財団事務局長

(敬称略)

| 受賞者の紹介 |

ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 功労賞

日本人審判員の育成をめざした各種制度の確立と運用

高田 静夫（日本サッカー協会 参与／1947 年生・東京都出身）

■選考のポイント

1980～90 年代にかけて日本を代表するサッカー審判員として活躍した後、「世界トップレベルで活躍する日本人審判員の育成」と「審判員の裾野の拡大」に取り組み、その基盤となる体系づくりに尽力した。具体的には「SR（スペシャル・レフェリー）制度」導入（2002 年）によるレフェリーのプロ化をはじめ、30 歳前後で日本のトップレフェリーとして活躍する人材の育成をめざした「JFA レフェリーカレッジ」の設立（2004 年）等に尽力した。さらに地域の審判員のレベルアップや優秀な人材の早期発掘を目的とした「審判トレーニングセンター（地域トレセン）制度」の立ち上げ時（2007 年）より、ダイレクターとして審判員並びに審判インストラクターの指導にあたっている。こうした実効性の高い各種制度の確立と運用により、岡田正義氏、上川徹氏、西村雄一氏ら、世界トップレベルで活躍する日本人審判員を継続して輩出することに成功した。2010 年ワールドカップ南アフリカ大会では西村氏ら日本人審判が準々決勝を含む 4 試合を担当し、また 2010 年クラブワールドカップ決勝では西村氏を含む日本人審判が主審・副審を担当した。一方、レフェリーカレッジの卒業生が J1 リーグを担当するなど若手の育成も進んでおり、質の向上と量の安定という 2 点において、高田氏が取り組んだ日本人審判員育成の基盤・体系づくりが大きな実を結んでいる。



■略歴

日本を代表するサッカー審判員として活躍した現役時代は、ワールドカップ・メキシコ大会（1986 年、日本人初の主審）やイタリア大会（1990 年）で主審を務め、また 1993 年に発足した J リーグでは初代 J リーグ最優秀審判員賞を受賞した。1994 年シーズンを最後に引退した後は、J リーグ審判委員会委員長（1996 年～）、日本サッカー協会審判委員会委員長（1998 年～）、アジアサッカー連盟審判委員会委員（2002 年～）を歴任し、2006 年より日本サッカー協会参与に就任。現役レフェリーとしての受賞歴は、上記 J リーグ最優秀審判員賞（1993 年）をはじめ、日本スポーツ大賞（1986 年）、FIFA スペシャルアワード（1996 年）など。

※2011 年 3 月 3 日現在

| 受賞者の紹介 |

ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 奨励賞

雪国から世界をめざすトレーニングの独自開発と実践

中村 宏之（北海道ハイテク AC 監督／1945 年生・北海道出身）

■選考のポイント

高校陸上部の指導者として経験を積み重ねた後、クラブチームである北海道ハイテク AC の設立に携わり、監督に就任。雪国である北海道で冬季に神経／筋肉系のトレーニングを実践するために、自ら 130m×5 レーンのインドアスタジアムの基本設計を行ない、母体である北海道ハイテクノロジー専門学校の支援により日本初の陸上競技室内練習場の建設を実現した。また、常識にとらわれない柔軟な発想で、リハビリテーション機器を転用した体幹トレーニングの開発や、フレキシブル・ミニハードルなど独自のトレーニング機材の開発等も手掛け、常にトレーニング法を進化させながら「北海道から世界へ」をスローガンにトップアスリートの指導に当たっている。アスリートの個性や自主性を重んじた独自の指導ノウハウにより、寺田明日香選手が全日本選手権の 100m ハードルで 3 連覇を飾ったほか、2010 年アジア競技大会の女子陸上 100m／200m で福島千里選手が 2 つの金メダルを獲得するなど成果を挙げた。日本女子短距離の底上げを図りながら、自ら「指導者としての総決算」と位置づける 2016 年リオデジャネイロ五輪では、「日本人初の女子 100m 決勝進出」と、福島選手、北風選手、寺田選手らによる「女子 4×100m リレー決勝進出」をめざす。



■略歴

現役時代は、陸上競技三段跳びの選手として日本選手権で 6 位に入賞するなど活躍。日本体育大学卒業後は高校の教員となり、中標津高陸上部で指導者の道をスタートさせた（その後、恵庭北高に転任）。定年退職後も引き続き恵庭北高の陸上部を指導しながら、北海道ハイテクノロジー専門学校在学する陸上競技のクラブチーム「北海道ハイテク AC」の監督に就任（2006 年）。所属選手である女子短距離の福島千里選手、北風沙織選手、寺田明日香選手らトップアスリートの指導を行っている。2010 年、北海道陸上競技協会指導者特別勲功賞を受賞。

※2011 年 3 月 3 日現在

| 受賞者の紹介 |

ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 奨励賞

強化システムの大改革で日本初のメダル獲得にチャレンジ

中北 浩仁（アイススレッジホッケー日本代表チーム 監督／1963 年生・香川県出身）

■選考のポイント

パラリンピック 2 大会連続で 5 位に終わった日本チームのメダル獲得を託され、ソルトレーク大会の終了直後に日本代表の監督に就任。選手の意識改革や、後ろ向き滑走をはじめとする個人技術の向上、さらに健常者アイスホッケーの戦術等を積極的に採り入れながら世界と戦うための土台づくりに着手した。2006 年トリノパラリンピックでは決勝トーナメント進出を逃し 5 位に終わったが、勤務先である日立製作所に熱心なプレゼンテーションを繰り返し、その結果、日立グループ 16 社からの強化支援資金提供を実現した。これによりさらに強化を加速させ、強豪国への遠征を含む年間 20～25 試合もの国際試合のマッチメイクや、主力選手の海外への武者修行を実現させながら、会社員としての業務の合間を縫って各国の競技団体との外交ルートを築き、積極的な情報収集にも当たった。2010 年バンクーバーパラリンピックでは、チェコと韓国を連破して決勝トーナメントに進出。準決勝では地元カナダを破る快挙を成し遂げ、銀メダルを獲得した（決勝戦はアメリカに敗戦）。2014 年ソチパラリンピックでは、「世界ランキング 1 位のアメリカを決勝で倒して金メダル獲得」をめざす。



■略歴

6 歳でアイスホッケーを始め、高校時代はカナダで、大学時代はアメリカの NCAA リーグで活躍。4 年時に膝の靱帯を断裂して引退を余儀なくされたが、卒業後は日立製作所に入社して主に海外での事業に携わる。2002 年、アイスホッケーの経験と見識を買われて、アイススレッジホッケー日本代表チームの監督に就任。勤務先である日立グループの支援を受けながらそれまでの強化策に改革を加え、2006 年トリノパラリンピックでは 5 位、2010 年バンクーバーパラリンピックでは銀メダルの獲得（パラリンピックの男子団体競技では夏季／冬季合わせて日本初）に貢献した。

※2011 年 3 月 3 日現在